

地球の木

♥地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- めざせ！軽薄短小型エネルギー……………1
- カンボジア職業訓練センター訪問……………2
- 3年振りの再会……………3
- 新たな活動地 新たな人々との出会い……………4
- 一ヵ月ランチ代一食分の支援がもたらしたものは……………5
- マンガルトール便り……………5
- 地球の木連続講座……………6
- カマル・フヤルさんのワークショップ……………7
- 活動日誌……………7
- INFORMATION……………8

めざせ！ 軽薄短小型エネルギー

理事 米林大作



2008年ネパール調査で村人の歓迎を受ける筆者



ソーラーパネルに興味津々

地球の木は、国際協力活動の中で「暮らし」という言葉を重要なキーワードとしている。そして昨年1月、田中優さんを招いての講座「温暖化防止のためのもうひとつの選択」以来、暮らしに深く関係するエネルギーに焦点をあて、連続講座を開催してきた。現在、世界では「地球温暖化」が大きな問題となっている。

2007年のIPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）の報告では、産業革命以後の化石燃料の大量消費による二酸化炭素などの増加が、地球温暖化を引き起こしてきたことを「ほぼ断定」した。過去100年の世界の平均気温は0.74℃上昇、このまま放置しておくると21世紀末には、最大で6.4℃気温が上昇する可能性があるという。その結果、地球規模で生態系に重大な影響を与え、貧困層や弱い立場にある人が、より多くの被害を受けることになる。エネルギー資源の争奪競争は、戦争や富の格差も産み出してきた。しかしIPCCの報告は、地球上の人々が「協力しあい、わかちあう社会」に変わらなければ、生命の源としての地球を維持させることができないと警告している。過去100年で、日本の平均気温は1℃、神奈川県は1.7℃、横浜は2.6℃上昇した。過剰浪費国に住む私たちは、世界を温暖化させるため、大きな貢献をしてきた。

昨年11月の地球の木連続講座「あなたにも作れる！ソーラーパネル」では、国際協力NGO「ソーラーネット」の指導により、参加者が出力35Wのソーラーパネル2枚を製作した。ソーラーネットは、現在インドネシアの村で太陽光

発電プロジェクトも進めている。ソーラーネット代表の桜井薫さんは「日本の協力でインドネシアに原子力発電所が建設される計画を知り、反原発の思いでインドネシアのプロジェクトを始めた」という。

日本政府は原子力発電を「持続可能な低炭素社会」の基幹電源と位置づけ、アジアへの有望な輸出産業としても力を入れている。しかし原子力発電は、たいへん危険なプルトニウムや放射性廃棄物を生み出し、日本でもその貯蔵量が膨大なものになっている。放射性廃棄物の半永久的で完全な「隔離・遮へい」など不可能にもかかわらず、その解決を将来にあずける形で建設は進められてきた。このようなことがなぜ持続的といえるのだろうか。そして原子力のような巨大産業には、大きな利権がからむ。また安全のための複雑なシステムは、人間性を排除し、徹底した管理社会をつくりだす。桜井さんは「太陽光発電は、電気を使う者が、使う所で、必要なだけつくる、地産地消の分散型社会にこそ活躍の場がある」と述べている。

地球の木講座で製作したソーラーパネルは、国民の85%が電気を使用できないネパールへ持って行き、有効利用してもらうことになっている。ネパールの現地NGO「SOARS」や支援地の「協同組合」の人たちは、ぜひ自分たちでパネルもつくり、太陽光発電をコミュニティ事業として実施したい希望を持っている。今後どのように進むか、不確定な要素はあるが、実現できればすばらしい。

カンボジア・タケオ職業訓練センター訪問

2008年11月26日～12月2日まで、地球の木会員の裁縫と織物の専門家に同行をお願いし、カンボジア・タケオ州にある職業訓練センターを訪れました。

より良いオリジナルグッズを目指して！

このセンターでは、親がいなかったり、貧困のために「売られる」危険のある少女たちが、カンボジアの伝統産業であるシルクの織物や小物の作り方を学びながら、手に職をつけ、自立していけるように支援しています。地球の木の役割は、オリジナルグッズを作りながらデザインの提供、裁縫技術の指導など「売れるモノづくり」ができるようにサポートする「ソフト面」での支援が中心です。今回は、現地滞在わずか3日という忙しい日程の中で、プノンペンの市場で糸やファスナーなどの付属品を買い付けたり、生徒たちに新しく発注するグッズの作り方の説明をして、型紙に合わせて布を裁断するところまでを一緒におこなってきました。今後も継続的に現地を訪れ、さらに実質的な縫製や作り方の指導などをおこなっていく予定です。また、今回、専門家のお二人の助言を得て、作業台の設置や道具の用意など、製品を作る作業環境の改善も並行して検討していくことになりました。

3月には注文したオリジナルグッズが一部到着します。センターの少女たちと一緒に作る「地球の木オリジナルグッズ」をぜひ、皆さまも応援してください。

(クメールシルクチーム 筒井由紀子)

織物クラス訪問記

大藪 明恵 (織物専門家)

センターのショールームは思ったより明るく、日本人にはなかなか発想できない色の取り合わせの、いかにもカンボジアらしいクロマー風のシルクショールが見やすく展示してありました。しかしよく見るとよこ糸がとんでいたり、端がゆるんでいたりして、課題も見えました。

織物の部屋は二つ。シルククロマーの方の部屋にはたくさんの織り機が並び、訓練生たちが織っていました。この機は基本的に日本のと同じような構造ですが、たて糸を巻き取る巾広の重い板があるところが違っていました。かなり細いたて糸がずいぶん巻き取られているので、どのくらいなのか聞くと、50メートル、長いときは90メートルとのこと。驚きました。日本の手織りの機では着物や羽織を作る反物も長くて24メートルくらいです。

緋織りのほうの部屋には巾広の大きい織り機が3台。カンボジアの緋は平織りではなくて緩織りです。よこ糸による緋の柄がきれいに浮かんでくるように工夫されており、ほんとうに手間ひまかかる緋が織られていました。

私は織物の先生と、新しいショールのデザインについて打ち合わせをしました。今訓練生が織っているショールは、クロマーから発展させたデザインともいえる、縞や格子のモダンなテイストのものですが、新しいタイプのものも提案したいと考えたのです。カンボジアのすばらしい緋の伝統技術を生かせるよう、クメールシルクのアンティークからデザインの一部を復刻したショールを作りたいのです。まずは先生にテストピースをお願いしました。価格は少し高めになりますが、いいものができれば日本で売れると思われず。

翌日、訓練生の作品を日本で売るためにまとめて買いました。どれにしようか見ていると、たくさんのショールの中にきらりと光るデザインのものがあります。「誰が織ったの?」と聞くと、リムちゃん。また別のショールもこれは誰とときとリムちゃん。私はその子を探し、「素晴ら

しいセンス、頑張って」と伝えました。将来が楽しみです。

最後の日、訓練生たちは私たちが乗り込んだ大型タクシーが見えなくなるまで、元気よく手を振ってくれました。裏の池には蓮の花がきれいに咲いていました。



説明する大藪さん(中央右)

カンボジアの織物

～すばらしい緋～

大藪 明恵

カンボジアの織物には綿のものと絹のものがあ、綿のものはクロマーと呼ばれる格子柄のスカートが代表的。絹のものでは、なんといっても緋が美しい。

カンボジアの緋には、ピダンという、お寺の荘厳品である緋緋もあるが、サンボット(スカート)やチョン・クバン(袴)などの衣服にする連続文様の緋がある。1メートル巾、3.5メートルが伝統的なサイズ。

カンボジアの緋はクメールシルクと一般によれば、7～12世紀に栄えたアンコール王朝の残した文化財。伝統的なものは赤をベースにしたもので、しなやかな手触り、色の美しさ、くくりの技術の正確さで、アジアの緋の中でもっともすばらしい緋と言われている。本来のクメールシルクはカンボジア原産の黄色の絹糸を草木染めで染めて織られていたが、内戦時代に蚕は食べつくされて、今はほとんどベトナム産の白い糸が使われ、染めも化学染料が主流になっている。そんな中で、現在、カンボジアの伝統ある染め織りの技術を再現しようという流れがあり、カンボジアの発展につながることを期待されている。

一生懸命な少女たち

広瀬 秀兒 (裁縫専門家)

昨年9月、同居していた母が亡くなり急に時間が出来た私に、カンボジアの子どもたちの支援を「手伝わないか」という話が持ち込まれました。思いもかけないことでしたが、以前より「何かお役に立つことはないかしら」と思っていたので、二つ返事で引き受けました。しかし、どんな所でどんな手伝いができるのやら、心配でした。

タケオは首都プノンペンから車で約1時間半。町をぬけ田んぼを眺め樹木の間を通過して、ぱあっと開けた所に職業訓練センターがありました。恥ずかしそうに、でも嬉しそうに10人ほどの子どもたちが、2人の先生と共に迎えてくれました。作業室に行ってみると、織物クラスの子は自分の織ったクロマーを手に、裁縫クラスの子は自分で縫った作品を手に、買ってもらおうと集まって来ました。私は胸が痛くなりました。今の仕上がりではとても買い取る事はできないのです。

翌日は早朝から市場に行き、必要なものを買って揃え、すぐ作業にとりかかりました。調達した織物を使って、日本で喜ばれるデザインや色彩のブックカバーや巾着袋、クッションカバーなどを作ってもらおうのです。型紙の取り方、布の裁ち方、接ぎ合わせ方など、一緒に作業しながら説明しました。ひとつも聞き漏らすまいとメモを取り、時折確認するように質問してくる子。見本を見ては自信ありげにうなずく子。手際よく次々と裁断し、次は何をしつらい



布の裁ち方を教える広瀬さん(左)

かと聞いてくる子。どの子もけなげで一生懸命です。あっという間に時間が過ぎ、時間が足りません。その日は子どもたちと一緒に家に泊めてもらう事にしました。

高床式の2階。ゴザを敷き、蚊帳を吊ってくれました。もうあたりは真っ暗。星が大きくこんなに沢山見えたのも、固い床に寝たのも初めてでした。

別れる時、子どもたちの瞳は期待で輝いているようでした。作業台も無く、床に広げて型紙をあて、植木バサミの様なはさみで布を裁ち、少ない糸でミシンをかける。でも一生懸命作ったら、買ってくれるに違いない。「ちゃんと作るからきつと来てね」と言っているように思えました。私はこの子達に分かり易く伝えられたのだろうか?きちんと下ごしらえが出来たのだろうか?この子たちの努力が報われるよう、祈るばかりです。

ご協力をおねがいします!

あなたのお家で眠っている「裁ちバサミ」(よく切れるものに限る)、お子さんが家庭科の時間で使っていた「裁縫セット」、糸、まち針、メジャー、物差しなどをご寄付ください。次回訪問時にセンターの裁縫クラスの少女たちに届けます。

また、裁縫、織物、デザイン、パターン、物品販売などこのプロジェクトに協力してくださる方を募集しています。

地球の木事務局までご連絡ください。



自分たちの織った作品を手に

from Siem Riap

カンボジア里親型支援

3年振りの再会

2006年、チャイルドケア・センター支援プロジェクトが終了し、新しく里親型支援として3人の子どもソッチエ、ソッチャイ、サッカナーの里親になりました。ソ

ッチエ、ソッチャイは20歳になり支援を終了し、現在サッカナー1人を支援しています。シムリアップで会った3年振りの子どもたち。ソッチエは、るしな代表の松本さんの経営するモロツポカフェでとても元気そうに働いていました。物腰が静かで丁寧な様子で、カフェのお客様にも評判が良く安心し



サッカナーと筆者とソッチエ

ました。ソッチャイは、バタンバンに寺におり会えませんでした。元気とのことでした。サッカナーは背も伸び少女から娘らしくなり、午前中は高校に行き、午後

はカフェを手伝っていました。成長し歩き始めた子どもたちの姿を見ることができて、勇気づけられ、安心しました。

支援もあと1年となりましたが、これからもご支援とご協力をよろしくお願い致します。

(カンボジア里親の会世話人代表 佐々木慧子)



新たな活動地、
新たな人々との
出会い

ラオスはのんびりした、緑の豊かな国である。周囲を山に囲まれ、人口はおよそ600万人。日本の本州とほぼ同じ面積であり、神奈川県の人口890万人を考えると、実にゆったりとした土地や人口密度である。しかし、ラオスの穏やかな暮らしに急激な変化が訪れている。森や自然をうまく利用して暮らしてきたが、ここ数年の経済開発で森は次第にゴムやユカリ植林、商品作物栽培に変わりつつある。

JVCは、2008年9月にカムアン県における活動を終了し、現在、隣のサワナケート県にて活動を始めている。サワナケート県はラオスの中では最も大きい県で人口も一番多い。中央には国道9号線が通っており、ベトナム、タイ、ミャンマーまで繋がっている。アジア開発銀行はメコン川流域の開発を推進しており、9号線は東西回廊として経済開発の中心地域となっている。日本も経済特区への資金協力を積極的に進め、バックアップしている。

このような中で暮らす村人の生活とはどのようなものだろうか。2007年に調査で訪問した村ではベトナム企業のゴム植林計画が12月に実行に移され、村人が反対していたにも関わらず、土地は取られ、貴重な森が伐採された。行政は1ヘクタール5万kip（日本円でおおよそ600円）を提供すると言ったそうだが、実行に移されるかどうかは分からない。何百年にも渡って土地や森を守り、利用してきた暮らしは変化せざるを得なくなっている。畑を見に行く道すがら、村人は「ここは将来の農業用地だったんだ。これからは町に出て働くしかない」と語っていたようだ。

新たな活動地において、未来に希望が持てる暮らしを村人と共に探していきたい。現地代表として、カンボジアにて活動の経験がある平野将人が、また、森林事業担当としてピエンチャンにて森林問題の調査・提言活動を行ってきたグレン・ハントが着任し、活動の準備を進めている。新たな視点に立った取り組みを、ぜひ一緒に応援して欲しい。

(日本国際ボランティアセンター ラオス事業担当 川合 千穂)
※地球の木では、このサワナケート県での新プロジェクトへの支援を検討しています。

ネパールSOARS調査報告

「一カ月ランチ代一食分」の支援がもたらしたものは……

1997年、10クラスの識字教室支援から始まった「ネパール教育支援プロジェクト」は、内戦や言論統制など未曾有の非常事態に見舞われながらも、81の識字教室を実施し、延べ2,000人の村人の参加を得た。1999年からは、識字教育と並行して収入創出のための裁縫・野菜作りなどのトレーニングが行われた。また、ネパール民主化のうねりの中では、公正な選挙のためのトレーニングも実施した。これらトレーニングはいずれも現地パートナーSOARSと村人との話し合いの中から生まれたものである。



「私の作ったきのこを見て！」
最後に極西部を訪れたのは2003年であった。以来、内戦はますます激化し、昨年は途中まで行って断念した。今回は治安が回復していたので、5年ぶりにやっと極西部まで足を伸ばすことができた。村々は変わっていた！平和が戻り、何でも言えるようになった、と人々は口々に言った。男性も女性も自信に満ち溢れた表情をしており、特に女性たちが大勢の人の前で堂々とスピーチをする姿が印象的だった。



シーズンオフのトマトを栽培する女性グループ

協同組合もできた！

生活クラブ生活協同組合から生まれた地球の木は、支援地の人々と交流する中で協同組合活動の利点を語り、「協同組合作りトレーニング」を実施してきた。しかし、人々が力を結集して強くなることを嫌った政府は、法外な登録料を課し協同組合の結成を阻んだため、なかなか実現に漕ぎ着けることができなかった。昨年11月の調査で分かった大きな成果の一つは、支援地に3つの協同組合が生まれていたことである。

SOARSのランチ開設をめざす

今回の調査で一番活気のあったシセイヤ村には、17の貯蓄グループがあり、「シムコ」という協同組合は、農業を基礎に保健衛生、ソーシャル・サービス、水などの分野で協働する「マルチCOOP」作りをめざしている。太陽電池に関心が高く、農業、灌漑などにもソーラーを使うことを考えている。SOARSのシセイヤ・ランチを開設することに意欲を燃やしている。

カトマンズ近郊でも

ニルマラさんの住むイマドール村から車で20分のルブ村でも、協同組合活動が盛んに行われていた。2年前に発足した「サドバ農業・多目的協同組合」の資金は224万ルピー（360万円）、現在40人の会員に195万ルピー（312万円）を貸し出している。預金者には6パーセントの利息を付け、ローンを貸す時には12パーセントの利子を取る。その差額を運営費に当てているという。子どものグループ貯金も扱っており、高校生がお金を預けに来ているところに行き合った。

ローンを借りて活動しているたくさんのグループを訪ねることができた。シーズンオフのトマト栽培を行っている女性グループ、牛糞や藁でバイオガスを作って売っている女性。そのカスを堆肥として販売し、自らも堆肥でカリフラワー作りをしている。2年前にイマドールの人材育成センターで交流した時には、「グループ貯金は貯まったけれど、何をしたらいいのかわからない」と先輩たちに相談していた女性である。ローソク作りをしている女性グループ。お祭りにローソクを使うので売れ行きがいいと言う。現在、編み物も練習中だが、町に売りにいく勇気はない。その他、織物工場を営んでいる家族、八百屋、ブティック、きのこ作りグループなど、協同組合が小規模ビジネスの成長を助けていることが確認できた。

終わりに

私たちの一カ月ランチ代一食分の支援が、こんなにも多くの人々に笑顔と希望をもたらしているのを見て、元気をもらったのは私たち地球の木の方だった。
(ネパールチーム 乳井 京子)

マンガルタール便り

奨学生と

「野菜栽培トレーニング」家庭が
選ばれました！

2009年度の奨学生16名（女子14名、男子2名）が、MSCC（マンガルタール村・SAGUN協力委員会）と現地NGO・SAGUNの話し合いの結果、決定しました。村の高校には村外からの学生も多いので、今年度からは他村からも選ぶことになりました。今回の応募も、女子がとても多く、11年生は7名（マンガルタール村より4名、他村より3名）、12年生は9名（昨年度より継続が5名、他村より4名）が選考基準をふまえ、選出されました。学生一人あたり年間6,000ルピー（毎月500ルピー）の奨学金は、高等教育を受けたくても経済的に困難であった学生の就学への夢をかなえます。

奨学生を含めた学生たちがニュースレター「Roshi Lahar」（ロシ川の波という意味……ムーブメントにたとえている）の取材に当たりました。よりうまく記事を書けるようになりたいと、書き方の学習を希望したため、著名な作家やコラムニストによるトレーニングが行われました。なおニュースレター第1号（ネパール語16ページ）は既に発行され、近隣の村や役所などにも配布されており「しあわせ分かち合いムーブメント」のコンセプトや実際の様子を伝えています。地球の木の紹介も2ページにわたり載っています。

また収入創出プログラムも始動しました。実はマンガルタール村の最も貧しい家庭は、カトマンズなど都市部に出稼ぎに出ており、働き手が村にいないのが現状です。今年度の「野菜栽培トレーニング」を受けるのは、生活が困難ながらも村にいて、これからも村の活動に貢献する意欲のある8家庭が選出されました。12月に2度のトレーニングを受け、参加メンバーによる委員会が設立されました。一家庭、年間5,000ルピーのローンを受け、無金利で次の年に返済する予定です。（注：1ルピー=約1.2円）
(ネパール 幸せ分かち合いチーム 岸 夏代)

* 親元を離れなくても高校に通える制度が確立したため



ニュースレター第1号ができあがった！

地球の木連続講座

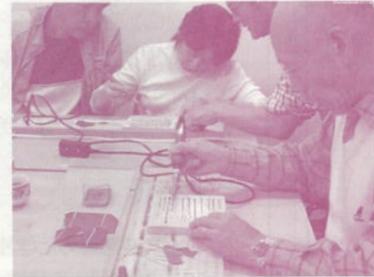
第1回の「映画『六ヶ所村ラブソディ』を見て、おしゃべりしようエネルギーのこと」に続く、第2回「あなたにも作れる！ソーラーパネル」そして、ランチによる第3回の企画の報告です。

連続講座第2回

あなたにも作れる！ソーラーパネル

11月16日、戸塚にある男女共同参画センターでソーラーパネル作りのワークショップが開かれた。一瞬会場はシーンと静まり返る。太陽光を集める10×5cmほどのセルをハンダ付けする一瞬だ。

失敗してはいけないと、参加者たちは緊張する。セルとセルを34枚張り合わせると、1枚分のパネルができ、それを風雨などから守るラミネートで覆うと、太陽光パネルが出来上がる。セルを張りあわせ、ひっくり返す時、ピキッという音がした。ひびが入ったのだ。その部分の小さなセルをまた張り合わせる。最後まで気を抜かない作業の連続だ。こうして苦労したパネルが出来上がったときは、どの顔も



「私にもできた！ソーラーパネル」

やったぞ！という満足感に輝いていた。

出来上がったパネルは、チームや理事会での検討の結果、支援先であるネパールのSOARSに送ることになった。パネル作りを指導した「ソーラーネット」は、これまでインドネシアを中心としたアジアの未電化地域に太陽光パネルを送っている。また、他のNGO団体からそれぞれの支援地に太陽光パネルを送りたいという希望にも対応している。

今回作ったパネルは小さいので、日本の家庭の電気使用量を全てまかなうことはできないが、電力も地産地消という希望が見えてきた。「シンプルライフ」である。(地球市民教育チーム 佐藤 葉)

第3回 湘南ランチ企画

茅ヶ崎からやさしい灯を「マイナス6%基金」のとりくみ

「マイナス6%って？」 京都議定書で温室効果ガス排出量の1990年比6パーセント削減を日本が世界に約束した目標値です。

1月18日(日) 善行公民館で、「ちがさき自然エネルギーネットワーク」代表の上野ひろみさんを囲んでお話を伺いました。「ちがさき自然エネルギーネットワーク」の皆さんは、公共施設等の屋根に太陽光発電を設置するという活動に取り組んでいます。その資金は、市民から提供の廃食油の売却代金を基金にした「マイナス6%基金」をもとに、(財)広域関東圏産業活性化センターのグリーンエネルギー発電基金からの助成金(設置費用の

85%)と市民からの寄付が充てられます。第1号機は茅ヶ崎市民活動サポートセンターの屋根に出力7.77kWを目指して設置され、点灯式は今年7月5日が目標です。設置が決定するまでには多くのご苦労があったそうです。

また、上野家では太陽光発電・太陽熱温水器・ペレットストーブなど 自然エネルギーをめぐって取り入れた暮らしをされており、「減CO₂大作戦」「省エネは創エネ」を実行されています。

みなさんも、一人でできること、家族でできること、大勢の人とできること、それぞれCO₂削減に向けて一歩踏み出してみませんか。(湘南ランチ 飯田 愛子)



第3回 川崎北ランチ企画

「六ヶ所村のその後を知るために」

1月23日(金) 豊田宅にて、六ヶ所村のその後を知るためにDVDで「六ヶ所村通信No.4」を見ました。湘南のサーファー達が原発の使用済み核燃料再処理工場のある青森県六ヶ所村までの旅の途中様々な出会いを経て、東北の漁業者と再処理反対の署名活動をする話や千葉の若者が「六ヶ所村ラブソディ」の上映会を企画する話など各地で広がる若者の行動が力強く伝わってきました。又、以前は漁業で生計を立てていた人達は、燃料高などで生活していくのが大変になりました。今は再処理工場で働

く事で、安定した仕事ができること話す賛成者の声もあり、地元で生活する厳しさも伝わってきました。

六ヶ所村の再処理工場が出す放射性物質は確実に海や空を汚染しているのです。「花とハーブの里」の菊川さんは「なぜ反対運動を続けているのか」の問いに「子ども達の為」と答えています。

「電気の消費地に住む私達はこれ以上電気を使わないよう生活を見直し、出来る事を実行しよう」「今後もずっと六ヶ所村を見続けよう」と話し合い、会は終わりました。(川崎北ランチ 豊田 由紀子)

カマル・フヤルさんワークショップ

私たちの村、私たちで作らしましょう

आपनी गाउँ आफै बनाउँ



1月31日、フォーラム・アソシエとの共催で、ネパールの開発ワーカー、カマル・フヤルさんを招いて、ワークショップが行われた。ねらいは、地球の木がカマルさんと実施している「幸せ分かち合いムーブメント」について知ること、その考え方を地域で活せるか考えることだった。外の寒さとは無縁のオルタ館の暖かい小さな部屋に、丸く椅子が並べられ20名ほどの参加者が席に着いた。カマルさんにはこやかに自己紹介した後、「いつが一番幸せですか」と皆に尋ねた。一生懸命仕事をして休む前の充実したときが幸せだと「金曜日の夜」と答える参加者が多かった。

次に自分の良いところは？とたずねられ「悪いところならいっぱいあるんだけど……」と照れながらも、良いところを再発見したかのように自信をもって一人ずつ発表。



カマル・フヤルさん あげようと外国から開発ワーカーたち

この「いいところ探し」はカマルさんが特に力を入れている点だ。

その後4つのグループに分かれて「私たちの理想の村」を考えた。大きな模造紙に、各グループの暮らしや考え方が反映されたそれぞれの村が描かれた。ネパールの村には、理想の村を作って

が来る。そしていつも村人に「問題は何か？」と尋ねるそうだ。たびたび尋ねられると村人は自分たちに問題があるのだと考えるようになり、先進国に一歩でも近づくことが幸せだと感じる。大きなお金が動くものの、しかし村人が幸せになることはなかったとか。

それならばと村の伝統や資源を尊重した参加型開発に移行していった。ネパールには昔から「アフノガオン アファイバナオン」という言葉がある。「私たちの村、私たちで作らしましょう」という意味だ。今地球の木と共に進めている参加型開発の「幸せ分かち合いムーブメント」もその一端だ。

この運動をより効果的にするにはどうしたらいいのかとカマルさんが最後に、参加者にアドバイスを求めた。「ネパールの人にとって何が幸せなのか」という疑問にぶつかったものの色々なアイデアが出た。カマルさんは「横浜の人たちがネパールの人々の幸せについて考えてくれたということがあればネパールの人々は嬉しいでしょう」と締めくくった。今回のワークショップの内容はカマルさんがネパールで実際に行っているものである。振り返ってみるとネガティブなことは何も考えない半日だった。

(広報チーム 浜辺 美英子)

活動日誌(12月~2月抜粋)

- | | | | |
|--------|---|------------------------------|--|
| 12月 6日 | なか区民活動センター祭り参加 ハロハロパーティ・ネパール調査報告(なんぶ・ここ) 地球の木サロン「アロマテラピー」 | 第8回ランチ連絡会 地球の木サロン「エッセイ修行」 | |
| 10日 | 地球の木サロン「実践英会話」 | 17日 | 「マイナス6%基金」(湘南ランチ企画) ネットワーク横浜新年会参加 |
| 15日 | 3ヵ年計画検討委員会全体会 | 20日 | 第7回理事会 |
| 16日 | 第7回ランチ連絡会(大和) | 21日 | 地球の木サロン「Tea&Talk」 |
| 17日 | 地球の木サロン「Wine&Talk」 あーすフェスタかながわ2009企画委員会 | 23日 | カンボジア現地訪問報告会(サポートセンター) 「六ヶ所村のその後を知るために」(川崎北ランチ企画) |
| 18日 | 第6回理事会 | 31日 | カマルさんワークショップ(オルタ館) |
| 19日 | 地球の木カフェ | 2月 4日 | よこはま夢ファンド研修会参加 あーすフェスタかながわ2009企画委員会 地球の木サロン「実践英会話」 |
| 20日 | 地球の木サロン「エッセイ修行」「アロマテラピー」 | 7日 | カンボジア市民フォーラムシンポジウム(東大駒場) |
| 21日 | ネパールスタディツアー2009説明会 | 10日 | 3ヵ年計画検討委員会全体会 |
| 26日 | 年末大掃除 | 17日 | 第9回ランチ連絡会 |
| 1月 5日 | 仕事始め | 18日 | 地球の木サロン「Tea&Talk」 |
| 10日 | ネパール現地調査報告会(なか区民活動センター) | 19日 | 第8回理事会 |
| 12日 | NGOかながわ国際協力会議出席 | 21日 | 地球の木サロン「エッセイ修行」「ハングルに親しむ」 |
| 13日 | 3ヵ年計画検討委員会全体会 「アジアを紡ぐ手仕事展」参加(WEショップ若松店) | 25日 | 地球の木サロン「実践英会話」 |
| 14日 | 生活クラブ新年会参加、地球の木サロン「実践英会話」 あーすフェスタかながわ2009企画委員会 | 26日 | JANICアカウントビリティ・セルフチェック実施 |
| 15日 | パレスチナ報告会参加 | 28日~3/1日 | DEAR開発教育全国ネットワーク会議参加 |

第10回総会のお知らせ

日 時：5月30日（土）13：00～16：30
場 所：オルタナティブ生活館2階オルタリアン

* 詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。

オープンOFFICE 地球の木カフェ 期末セール★アジアフェア



日 時：3月27日（金）11：00～18：00
場 所：地球の木事務所（関内駅南口下車徒歩1分）

2008年度の期末セールです。
アジアのグッズが30%～70%OFF。春物のスカーフも入荷しています。
バナナケーキやクッキー、カレーもご用意しています。同封のちらしをお持ちください。地球の木会員のみにお得な飲み物クーポン券がついています。

ありがとうございました

地球の木カレンダー2009「風のささやき」は、おかげさまで1,225部完売いたしました。
皆様のご協力に心より感謝いたします。収益は地球の木の各支援プロジェクトに使わせていただきます。

年末募金キャンペーン2008報告

皆様の温かいお志をありがとうございました。

| | |
|----------------|----------|
| ■ミャンマー募金 | 5,000円 |
| ■ネパール幸せ分かち合い募金 | 14,000円 |
| ■太陽光発電募金 | 19,500円 |
| ■カンボジア募金 | 33,000円 |
| ■ラオス募金 | 2,000円 |
| ■無指定 | 56,700円 |
| ■合計 | 130,200円 |

書き損じハガキはありませんか

地球の木では、年賀状などの書き損じハガキや未使用切手をご寄付願っています。家でそのままになっているものがありましたら是非ご寄付ください。

ガザ緊急救援募金を行いました

昨年12月27日から始まったイスラエルの攻撃により、パレスチナ・ガザ地区で1,300人以上が亡くなり、5,300人以上が負傷しました。以前よりガザ地区はイスラエルによる封鎖が行われており、食料や医療も自由に手に入れることができなかった状況の中での攻撃でした。現在停戦とはなっていますが、封鎖は依然として続いています。

地球の木では、皆様からの募金と緊急募金の準備金とを合わせて50,000円を日本国際ボランティアセンターに送りました。「PMRSパレスチナ医療救援協会を通じた緊急医療支援」に使われます。

また、ガザの封鎖の解除を求める署名を送りました。ご協力ありがとうございました。

あーすフェスタかながわ2009

日 時：5月16日（土）17日（日）
場 所：かながわ地球市民プラザ
（JR本郷台駅改札を出て左手）

神奈川県で最大規模の多文化共生のお祭りです。地球の木は、「かながわと世界のともだち展」の企画に参加します。

世界の屋台村では海鮮ちぢみ
ワールドバザールでは支援地のグッズ販売を行います。

当日のボランティアを大募集しています！
お問合せ、ご連絡は事務局まで

地球の木サロンのお知らせ

現在、開講している講座は、どの講座も講師とともに、和気あいあいとやっております。新しい講座も現在、企画中です。今年の春から、あなたも仲間に入りませんか。

会報作成チームからのお知らせ

一緒に会報作りをしませんか？
あなたの新鮮な感覚をお待ちしています。
事務局までご連絡ください。



3月に予定されていたネパールスタディツアーは、参加者が最小催行人数に達しなかったため、残念ながら中止となりました。

今年の夏に再度計画の予定です。関心のある方は今後のお知らせをご覧ください。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど